ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.20 No.4 April 2019

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

4

CONTENTS

- 巻頭言
  私たちは何を結ぶのか
  ／高見宇造 1
- 「元初まりの話」に登場する動物たち（39 最終回）
  「元初まりの話」と進化論
  ／佐藤孝則 2
- 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相（28）
  太平洋戦争と北米伝道 ⑥ アメリカ本土での戦後復興
  ／尾上貴行 3
- 日本語教育と海外伝道（9）
  国内での日本語教育と海外での日本語教育 ④
  ／大内泰夫 4
- キルケゴールで読み解く 21 世紀（7）
  サイバー空間における「分身の術」と生身の人間
  ／金子 昭 5
- ライシテと天理教のフランス布教（17）
  ライシテと医療 ②
  ／藤原理人 6
- 伝道と翻訳 ―受容と変容の“はざま”で―（16）
  初期仏教に見る「ことば」の諸相 ⑤
  ／成田道広 7
- コロンビアへの扉 ―ラテンアメリカの価値観と教えの伝播―（3）
  1. ラテンアメリカ基礎知識の話
  ／清水直太郎 8
- コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論（25）
  ベルギー領コンゴの独立 ②
  ／森 洋明 9
- 遺跡からのメッセージ（44）
  文化遺産を今に活かす ⑪ 壮大な横穴式石室をもつ塚穴山古墳
  ／桑原久男 10
- ヴァチカン便り（37）
  法王はアラビアへ
  ／山口英雄 11
- 思案・試案・私案
  児童虐待：映された親と子、そして夫婦
  ／堀内みどり 12
- 図書紹介（111）
  『きりしたん受容史―教えと信仰と実践の諸相―』
  ／金子 昭 13
- おやさと研究所ニュース 14
  2018 年度「教学と現代」報告（金子昭）
  キリスト大学国際会議に参加（堀内みどり）
  ／第 319 回研究報告会（尾上貴行）／『グローカル天理』年間購読のご案内／「出前教学講座」申し込み受付／ 2019 年度公開教学講座の案内

巻頭言

私たちは何を結ぶのか

おやさと研究所長 高見宇造 *Uzo Takami*

学生時代の話で恐縮だが、天理教の原典である「おふでさき」を学び始めたころ、しやハせをよきよふにとてじうぶんにみについてくるこれをたのしめ（二号 42）というお歌の理解に困惑したことがある。「幸せ」が「良くなる」とはどういうことか。本来、「幸せ」は人間にとって良いことではないかと思ったからである。後日、「しあわせ」は「仕合わせ」という表記で、「めぐりあわせ」(『日本国語大辞典 第二版』小学館）の意が第一義であることを知った。さらに転じて「出会い」を意味するようになる。このお歌は「信仰の道に付いてくるならば、様々な出会いや巡り合わせが変わってくる」と理解すればどうだろうか。人はその中で救けられることを教えている。

ところで私は、去る２月 17 日、国際宗教研究所・上智大学グリーフケア研究所（島薗進所長）主催の公開シンポジウム「支え合う、はぐくむ、宗教の力」（会場・上智大学）に出席した。冒頭、主催者から、「宗教」（Religion）の由来は「再び」という接頭辞 re と「結びつける」という ligare であり、「つなぎとめる」「むすびつける」という意味があり、今その本来の力が問われているとの開催挨拶があった。

発題は、池田奈津江氏（弥生神社権禰宜）が「宗教的縁とつながりの創出―東日本大震災の被災地から地域の神社へ―」、ビスカルド篤子氏（カトリック大阪大司教区社会活動センター）が「社会の谷間に置かれた人びととの関わり」、吉水岳彦氏（臨床仏教研究所研究員）が「ご縁をむすんで、支え合い、はぐくみあう―仏教の慈悲と支縁―」等であった。

どの報告も興味深いものであったが、池田氏が東日本大震災被災者を「カテゴライズするのは意味がない。生老病死が全て苦であるわけでなく、喜怒哀楽のある血のかよった人間」であること、そこでは何よりも傾聴が求められ、「お互いが持つ多様な宗教的縁の覚醒と言葉の力が人を結びつける」というお話はとても心に残っている。最後、仏教者の吉水氏は東京・山谷でのホームレス、子どもたちの支援に取り組むなかで、仏教の目指すものは「支援」に止まるのではなく「支縁」にあることを学んだという。氏は「支援」とは本来何を意味するのかを考えるなかで、「支縁」即ち様々な出会い、「縁」を支援することにあると気付かれる。曰く、仏教が結びつけるものは「仏と人」だけではなく、「人と人」「宗教と宗教」「人と居場所」「活動したい心と活動したい心」、さらには「私とありのままの私の心」「過去の自分と現在の自分と未来の自分」「死者と生者」「現世と来世」まで拡がるというお話であった。一つひとつ、事例を挙げてのお話から私自身は大いに考えさせられた。冒頭の「おふでさき」の理解から、人は様々なものとの出会い、結びによって救けられると述べた。では私たちの信仰にあっては何を結ぼうとするのか、「しやハせをよきよふに」するのか、今一度思案をしてみたい。吉水氏の思いを聞き、私は大きな宿題をいただいた。

ところで今回、特に天理教麹町大教会長の久保一元氏が、「天理教の教会としてのあり方―あたたかい家族のようなコミュニティを目指して―」と題して報告を行ったので、とても嬉しく聞かせていただいた。また出席者の高い関心も窺われた。内容は子ども食堂の取り組みを通して、教会が地域の「ひとり親家庭」「高齢独居老人」「在日外国人」とのご縁、出会いが生まれ、そこから支援、おたすけへと結ばれているお話であった。久保氏が今回のシンポジウムで発題した意義は、「しやハせをよきよふに」のお歌の理解を考え合わせるとき、決して小さなものではないと思いながら会場を辞した。